

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」(2012年度第2回研究会)

日時：2012年6月2日(土) 13:30-18:30

場所：AA 研小会議室(302)

報告者1：北川勝彦(AA 研共同研究員、関西大学)

報告タイトル：アフリカ史叙述の方法に関する一課題

報告者2：富永智津子(AA 研共同研究員)

報告タイトル：「個人史記述の新しい試み—ンクルマとニエレレ、そしてナセルに夢を託したある女性の軌跡から—」

1. 北川勝彦「アフリカ史叙述の方法に関する一課題」

近年、アフリカ史研究には、環境史ないし人類史の長期的展望にたった「連続性」の主張やアフリカ人ディアスポラの研究にみられるように非アフリカとの広範な関わりを意識した「接続性」の主張が現れてきた。とくにアジア史との接続の試みには注目すべきものがある。これらは世界史におけるアフリカ史の再中心化の試みと称してよいであろう。

ここには、今日に至るまでアフリカ史研究において続けられてきた二重の知的営為が示されている。すなわち「普遍性」を独占してきたヨーロッパの「周辺化」(provincializing)とヨーロッパ中心主義のなかで「周辺化」されてきたアフリカの「普遍化」(universalizing)である。このジレンマを克服するためには、アフリカ史研究で用いられてきたヨーロッパ中心的な歴史概念や分析カテゴリーに注意を払いながら、時間的にも空間的にもアフリカ史研究を深めグローバル化することで、アフリカ史の再中心化にむけた持続的な努力が今後も求められるであろう。

本報告では、そうしたアフリカ史研究の方向の一つとしてアフリカ人ディアスポラの世界に関する歴史研究について考えてみた。しかし、それには先行研究の検討、ディアスポラ概念自体の吟味と再定義、アフリカ人ディアスポラの地域的広がり、歴史的展開と当該研究に必要な概念の構築など考えるべき課題は多い。

とは言え、アフリカ人とその子孫の歴史は、それ自体複雑なものであるが、人類の歴史の中心に位置する。とくに近代の歴史は、アフリカ大陸とアフリカ人の子孫への十分な配慮がなければ正しく語ったことにはならない。過去6世紀にわたるアフリカ黒人の歴史については、かれらの築き上げてきた世界こそグローバルな結合をもたらしたものとして語ることが何よりも必要である。個々の地域や国家ないし民族の歴史を語ることに加えて、アフリカ、南北アメリカ

カ、ヨーロッパ、アジア全体を通して人々の相互関係 (interconnections of people) の歴史を語ることの重要性を今ほど認識しなければならないときはないであろう。

加えて、日本人アフリカニスト史家としてアフリカ史の諸問題に立ち向かう現在意識が先駆者たちとどのように重なり合い、また異なるのか。本報告では、これらも、また、アフリカ史叙述にかかわる課題の一つとして取り上げ検討した。

2. 富永智津子「個人史記述の新しい試み—ンクルマとニエレレ、そしてナセルに夢を託したある女性の軌跡から—」

資料 : Gerald Home、*RACE WOMAN : The lives of Shirley Graham Du Bois* (New York University Press, 2000)

課題 : ひとりのアフリカ系アメリカ人女性の政治思想の形成とその実践を通して、ある時期の「アフリカ像」を世界史のなかに浮かび上がらせる。

叙述の方法 : 個人史に語らせる方法。ある特定の個人と「アフリカ」とが交差する世界を描くことによって、中心/周縁をクロスオーバーする歴史空間を叙述する。

研究史の中の位置づけ : パン・アフリカニズムとディアスポラ研究の一環

本報告で取り上げた Shirley Graham Du Bois(1896~1977)は、インディアナポリスで牧師の娘として生まれ、幼い時に経験した人種差別、父親の人道主義、父親への白人優越主義者からの脅迫といった環境の中で黒人としての意識に目覚め、次第に左翼思想にのめりこみ、1940年代に共産黨員となり、戦後吹き荒れたマッカーシズムの中で国外追放になった女性である。彼女がトランスナショナルな活動の拠点として選んだのが独立後の国家建設期にあったガーナである。ガーナ大統領ンクルマの片腕として TV 局の設立や教科書の書き換え、出版局の立ち上げなどの仕事をこなしたが、ンクルマの失脚により拠点をカイロに移す。以後、エジプトのナセル大統領やタンザニアのニエレレ大統領との交流の傍ら、モスクワや中国とも接近、最後まで社会主義とパン・アフリカニズムの思想を捨てることなく、中国で病死した。

グレームが歩んだ軌跡には、アフリカ大陸から連れだされて離散した奴隷の子孫としてのディアスポラ性と、アメリカ当局から追放され、祖先の地アフリカに辿り着いた現代のディアスポラ性が重なりあっている。そこには、アフリカとアメリカとの間を繋ぐ幾本もの細い糸が次第に太くなり、アフリカとアメリカで「革命」的变化を同時に起こすという「夢」に結集していくプロセスが編みこまれている。そこでは、socialism, communism, anti-colonialism, left-nationalism, pan-africanism, race-feminism, Afrocentrism がさまざまな表現媒体 (オペラ制作、劇作、作曲、演奏、俳優、ピアニスト、詩作、自伝作家、教師、政治運動、アドバイザー……)

を通して展開する。そうした活動の集大成として、彼女が夢を託したのは、アフリカではンクルマやニエレレの社会主義とパン・アフリカニズム、そしてナセルのアラブ社会主義、アメリカではマルコム X、カーマイケル、アンジェラ・デイヴィスといったブラック・パワーだった。モスクワや中国について、彼女は、両国の外交政策が、見掛けは左翼だが本質はアメリカとかわらないことを見抜いていた。しかし、彼女の政治理念を支える源として、最後まで両国、なにかんづく中国に希望を託した点においては、生涯、主義主張を通し変節しなかった数少ないひとりだった。シャーリーの悲劇は、アメリカ社会の黒人解放運動が穏健なキング牧師の市民権運動へ傾斜して国際性を失い、ンクルマの失脚によって実践拠点としたガーナから追放され、まさにデラシネとなったことであろう。

女性史/ジェンダー史から見ると、当時の白人男性優位のジェンダー秩序の中で、社会から要求される母親・妻としての義務と責任を、ある時は放棄し、ある時は別の形で補いながら、黒人の女性として、左翼の女性として、有能な女性として政治思想を実践し、国際的に影響力を發揮したグレアムの軌跡は、当時の国際社会の人種とジェンダーの重層的な秩序を反映していたといえるだろう。その中で、彼女があえて、女性の解放より人種差別と植民地主義との闘いを優先したことは、彼女のアフロ・アメリカンとしてのアイデンティティの強烈さを示している。

彼女の生き方と行動は、理想と幻想、現実と虚像とのズレが引き起こす相克や葛藤の軌跡である。そのような女性を輩出した歴史的背景に、トランスナショナルでありながら、あくまでも族的（アフリカ系）アイデンティティに固執して「アフリカ」と「アメリカ」を結びつけようとしたブラック・ディアスポラ性があり、国際的アリーナでのパン・アフリカニズムがあった。

課題と展望

- ① 「アフリカ」を浮かび上がらせる方法としての個人史記述
- ② 女性・ジェンダーの視点を導入する方法としての女性の個人史
- ③ 世界史へのアフリカ史の接続のためのパン・アフリカニズム再考

その他の情報—1960年代の left internationalism と Pan African activism との間を探る上で重要なその他の女性たち

- **Maya Angelou** (1928~)
- **Vicki Ama Garvin** (1915~2007)
- **Amy Ashwood Garvey** (1897~1969)
- **Claudia Jones**(1915~64)

(いずれも文責は報告者)